

パスカルにおける理性の意味

—その限界— (一)

森 川 甫

「われわれが真理を知るのは、ただ理性によってのみでなく、また心情によってである。この後者によって、われわれは第一原理を知る。」(fr. 282)¹⁾パスカルにおける理性 *raison* は心情 *coeur* と相関的であり、心情は理性を前提としている。理性の限界が決定された後、「第一原理を知る」ことのできる心情のあらゆる理論が展開されるのである。それゆえ、理性の限界の決定は心情の理論の入口となるのである。

理性の限界を決定するさい、パスカルが根拠とする点は次の通りである。(1)ア・ポステリオリな根拠——哲学者が犯す過誤や矛盾。²⁾ (2)ア・プリオリな根拠——悟性の能力が限られていることとその対象が無限であること。理性を批判するときパスカルの「背後の思想 *pensée derrière la tête*」³⁾ は人間の根源的墮落というポール・ロワイヤリストの思想である。すなわち、「なぜなら、もし人間がはじめから墮落していなかったとすれば、彼はその無罪の状態のまま、真理と幸福を確実に享受していたことであろう。もしまた人間がはじめから墮落していたのでしかなかったならば彼は真理と幸福について何らの観念ももたなかったであろう。」(fr. 434)

パスカルの理性観に対して、多くのパスカル研究家は相反する評価を下している。クーザン Cousin はパスカルの理性観に対して強い疑念を表わし、アルノー Arnauld やニコル Nicole の「思慮ある理性論」を対立させているのに反し、ジロー Giraud, シュヴァリエ Chevalier やブロンデル Blondel はパスカルの主張する思惟の高貴さを非常に高く評価することによって、パスカルがポール・ロワイヤルの思想から離れており、ジャンセニズムをユマニズムによって緩和していると主張している。

実際には、パスカルのいだいている思想はポール・ロワイヤリストと文字通りではないが、精神

において全く即応していると思われる。

それでは、ポール・ロワイヤルの神学者にとって、知性の墮落とは何を意味しているであろうか。

彼らにとって、根源的墮落とは人間存在の全的な、絶対的破滅を意味しているのではない。その破滅によって、神により原初、創造された良き本質が邪悪な本質に代替したことはない。いわばわれわれの存在の軸が悪い方向にゆがめられたのである。他者を導く機能である意志は創造主なる神の代りに被造物を崇めるよう、方向をゆがめているので、われわれの欲求、認識はそれ以後、誤った方向に向けられているが、それは本来の能力においてでなく、その実際の使用においてである。知性は意志よりもはるかに墮落しているというのではないとの聖トマスの説を受入れるだけで満足しないで、知性は意志に従属している限りにおいてのみ墮落しているということを付け加えねばならぬと、アルノーやニコルは主張している。事物の諸関係を知覚し、真理に関する原理を判別する能力としては、知性は何ら変化も、その能力の減少もうけていない。なぜなら、知性は結局、「良識 *bon sens*」あるいは「自然の光」だからである。この意味でデカルトが理性はすべての人々に平等に配分されているのであり、理性の適用の違いが人間相互の相違をつくり出しているのだと主張する⁴⁾のは恐らく誤っていないであろうとアルノーはいう。この理性の適用の仕方の違いが罪のない人間と墮落した人間との相違をつくり出している。つまり、「自然の光」の適用は注意力による。それは結局、意志によるということである。墮落した人間においては、意志は邪悪によって支配されているので、邪悪は意志が神礼拝の方向へむかうことを妨げ、被造物崇拜、そして遂には自己崇拜におもむく。

以上のことから、次のことが結論される。その対象が邪悪と関係のない純理的学問においては、

例えば、幾何学、天文学、あるいは自然学 *physique* においては確実な真理に達しうる。事実、これらの学問によって得られた真理の数は世紀を経る毎に増加している。ポール・ロワイヤルのアルノーとニコルは理性の進歩的な力を高く評価し理性を否定する人々に対して、デカルトが否定しえないような用語で抗議している。

逆に、人間理性は神や神の律法の認識に関しては、過誤から過誤へと動揺するだけである。なぜなら、この種の認識は邪悪と直接関係があるからである。邪悪の本質こそ、真の善である神から人間の魂を遠去けるものである。墮落した意志は被造物崇拜に強く結びついているので、人間の精神が被造物を求めることを止めさせず、かえって精神が至高にして無限な善を認識することができないようにするとアルノーは云う。かくして人間理性は自己愛へとおもむき、道徳の原理として神をまた道徳的真理がこの神に基いているということ認識できなくなるのである。

以上の、ポール・ロワイヤリストの思想はまさにパスカルの理性に対する見解でもある。パスカルは抽象科学、すなわち、数学や自然学に関しては人間理性の力を疑わない。しかし形而上学や道徳に関しては、人間理性は殆んど全く無力なのである。

以下、理性の限界を、(A)抽象科学、(B)形而上学(C)道徳、に関して調べてみよう。⁵⁾

(A) 抽象科学——数学、自然学

パスカルによれば、自然学的価値は実験 *expérience* によって保証される。彼は生涯、多くの実験をおこなった。実験の証拠力は彼にとっては疑問の余地のないものであった。これは、真空論に関してパスカルがなしたノエル神父への反駁にみることができる。⁶⁾ 数学的価値も、自然学的価値が実験によって保証されたように、証明 *démonstrations* によって保証される。

「私はデカルトを許すことができない。」(fr. 77) 「無用にして不確実なデカルト」(fr. 78) などの断章で見られるような、デカルトに対するパスカルの敵意はここでは、それらしきものも全く見当らない。パスカルはデカルトと同様、一度獲得された真理によって樹立されている科学、そして、その科学的真理の総和が年月を経るにつれ、絶え

ず増加してゆく科学を信じているだけでない。これらの真理の獲得は事実や推論に関する個人的に経験した明証性 *évidence* に依拠しているというだけではない。彼はデカルトと同様、「人間のうちで最も完全なもの」⁷⁾ を幾何学的秩序にまた、知識の理想的形体を数学的確信に見出している。科学の名に値いするあらゆる認識はこれらに還元されなければならない。還元されることのできないすべてのものは、人間理性の能力を超えたものによって啓示されるのである。「幾何学を超えるものは、われわれを超えている。」⁸⁾

デカルトが数学を自然に関する科学に適用することを語るとき、彼は機械的自然学 *physique mécaniste* を意図している。「私の自然学全体は機械学と幾何学だけである。」ところで、機械的自然学のこの思想をパスカルは拒否しているだろうか。否、拒否するどころか彼は明瞭に受入れている。すなわち、パスカルは次のようにいう。「デカルト。——〔大まかにこういうべきである〕『それは形状と運動から成っている』と。なぜなら、そのことは真だからである。」(fr. 79)

ただし、パスカルは直ちに付け加える。「けれども、どんな形状、どんな運動であるかをいい、機械を構成してみせるのは滑稽である。」(fr. 79) なぜ、「滑稽である」のか。まず第一に、宗教的見地から、つまり、アウグスチヌス、あるいはポール・ロワイヤルの見地からすると、「唯一の必然」を取扱わない科学は空虚なものにすぎない。つまり、その成果が生命の善用とは無関係な純粋に理論的な研究に時間をかけるのは「無用であり、不確実であり、困難であるからである。それがたとい真であったとしても、われわれは、あらゆる哲学が一時間の労にさえ値いすると思わない。」

(fr. 79) 第二に、純粋に科学的見地から見ると、諸現象の細部に浸透し、諸原因の内奥の原動力を働かすと主張するこれらの説明は、どの検証も通っていないので、推測に基くものであると断定される。つまり、「それは不確実である。」(fr. 79) パスカルは他の断章でデカルトは「自然についての小説」⁹⁾ を書いたと述べている。微細物質に関する理論、つまり、「本性上では無限に分割されるにしても、われわれの感覚がもはやそれを超えるると何も認めえなくなる点を不可分点と呼んで

いる」(fr. 72) のと同じ欠点をもつ。いいかえれば、仮設としてのみ存在するか、仮設としてのみ存在しうるものをデカルトは確実なものとなすという欠点を犯している。

以上のことから次のことがいえよう。

デカルトの自然学に対してパスカルが非難するのは、その機械的な性格ではなく、独断論である。ここでまず最初に、パスカルが独断論であるとするものが、デカルトの事実か否かを調べてみよう。

デカルトは確かに、自然学の一般的原理を極めて確実なものとなす。すなわち、1. あらゆる物質的現実を形状と運動に還元すること。2. 運動の法則を決定すること。天体や地球の自然的特性や物質的事物の隠れた構造や機械の細部を外観に即応し、生命の善用に役立つ真実らしい方法で説明したいという野心を彼はもっている。

デカルトにとって確実なことは、自然的現象が機械的説明によってのみ説明できるということである。「私は自然学における原理として、幾何学あるいは抽象的数学におけるのとはちがった原理を、容認もせず要請もしない。」「なぜなら、このようなやり方で、あらゆる自然現象は説明されるし、それらについての確かな証明が与えられることもできるからである。」「実際、ありのままを打ち明けると、私は、物体的事物の質料としては、幾何学者たちが量と名づけて、彼らの論証の対象としているもの、すなわち、あらゆるしかたで分割され、形づくられ、運動させられることのできるもの、よりほかには認めない。なおまた、こういう質料において、その分割・形状・運動のほかには、まったく何も考察しない。」「こうして、あらゆる自然現象は説明することができるのであるから、私は自然学の原理としては、ここに示したものを以外には、何一つ容認すべきでないし、かつまた要請すべきでもない、と考えるのである。』¹⁰⁾以上が、デカルトが『哲学原理』で述べる主張である。このことをメルセンヌ Mersenne への手紙でも述べている。すなわち、「特殊な現象を可能な、多様な方法で説明しうると思いますが。しかし、事物一般の可能性は真実である唯一の方法によってしか説明できません。』¹¹⁾ 結局のところ、デカルトの主張は既に引用した断章の中で、パス

カルが「大まかにいわねばならぬ。それは形状と運動によってなされる。」と述べているのと同じことではないだろうか。

一つの現象を説明するのに可能で多様な方法の中で選択するとき、デカルトは次のような一つの処置しか見出さないのである。「それを説明しなければならぬ仕方がこの仕方が、あの仕方が、それに従って結果が同じでないというような、そのように幾様でもある実験を何度でもこころみるよりほかの処置を私は知らないからである。』¹²⁾そこから次のことが結論される。デカルトにとっては、自然学は実験によってしか進歩しえない。そうすると、彼はパスカルの次の言葉に同意見であろう。「実験は自然学において従わなければならぬ真実の師である。』¹³⁾パスカルは自然現象のどの説明も機械的考察に帰納されねばならぬというデカルトに同意するであろう。事実、パスカルが流体静力学を取扱おうとしたのは機械学の章であった。デカルトは帰納の客観的価値は如何なる場合でも実験によってしか保証されないことに同意するであろう。両者共、今日、われわれが実験科学と呼んでいる科学のことをいっており、両者の距離はしばしば普通想像されているほど、超え難いものでないのではないだろうか。

それにもかかわらず、独断論の問題に関してはパスカルがデカルトと遠く距っていると主張するのは誤りではないということは明白である。科学的確信に関する思想ではなく、科学の及ぶ範囲に関しては、パスカルはデカルトと距離があることは疑いの余地のないことである。

デカルトは科学に絶対的価値を与えている。それは事物に神秘的基礎がないと彼が想像したということではない。彼は明瞭に逆のことをいっている。現実においてわれわれが認識できるものは、何から何まで、ある意味では、神がそれに関してもっているのと同じ認識でありうる。「最後まで到達できぬほど遠くにあるものも、発見できぬほど隠されているものも、断じてありえないであろう。」そして、「如何なる事においても発見せらるべき真理はただ一つしかないのであって、その真理を発見しうる人は如何なる人にもせよ、そのものについては人の知りうるかぎりを知るのである。』¹⁴⁾

パスカルにとっては、科学はその対象をその拡がりにおいても深さにおいても究めつくしえない。パスカルはデカルトが「科学をあまり深く研究しすぎる」(fr, 76) といっただけで非難している。これに反して、デカルトはガリレー Galilée に全く逆の非難をしている。すなわち、「自然の第一原因を考えずに、幾つかの特殊な結果の理由を求めただけであり、かくして、基礎なしに科学をうちたてたのである。」¹⁵⁾ これを別の言葉でいえば、ガリレーの自然学は形而上学的基礎をもっていないということである。それは、彼の自然学の真理はア・プリオリに純粋な推理によってたてられうるということではなく、彼の自然学の用いる概念は単純な自然に、完全に明晰で判明な要素に還元できるものでなければならないということである

パスカルは科学が理性の中に基礎をもとうとするのは不合理だと考える。なぜなら、それは限らない逆行を仮定することになるだろうからである。われわれの分析が如何に高くさかのぼっても絶対に第一原理には到達しえない。恐らく、分析が立ちどまることを余儀なくされるような概念や真理に出会うであろう。その概念や真理を定義したり、証明する方法が学者にはもはやないので、それを原理と呼び、そして皆が彼に同意することを求めるのである。「第一の既知の真理に到達すると、そこで立ちどまり、それらの真理を証明する、さらに明白なものがないところから、人々がそれらを真理として認めることを要求する。」¹⁶⁾ しかし、これらの自称原理は権利として、「それ自身に拠って立っているのではなく、他の命題によって支えられているのであり、この命題もさらにまた他の命題を支えとしてもっているのであるから、決して最後のものではありえない。」(fr. 72) 科学は「その原理の多い点、細かい点でも、また無限である。」(fr. 72)

パスカルにとっては、科学は「その探求の領域に関して無限である。」(fr. 72) なぜなら、科学は「解かなければならない命題が無限に無限にある」(fr. 72) からである。結局のところ人間知性には、科学全体をとらえ、世界や真理の全体観に達することは不可能である。「私はあらゆることについて語ろうと思う、とデモクリトスはいった。……『事物の原理について』とか『哲学の原

理について』といったたぐいのありふれた書名が生じた。……それらは、外見上はともかく、事実上、『人の知りうるすべてのことについて』というあの人の目をうばう書名と同様、虚栄的なものである。」(fr, 72)

デカルトは単純な直観により知識の中心に一挙に身をおいて、あらゆる領域に対して価値のある同一の方法により、諸事物の完全な体系を演繹する。デカルトは「只たんにある現象を説明する代りに、私は自然のすべての現象、つまり自然科学全体を説明しようと決心した」と述べている。この統一、全体性、体系化は、デカルトには真の科学のしるしであり、殆んど条件でさえある。このことは『精神指導の規則』においてデカルトがよく示している。¹⁷⁾ パスカルは、人間はひとしく「諸事物の中心に達しえないし、また、その周辺をいただくこともできない」(fr. 72) と主張する。多様な科学的業績のなかで、彼は研究分野を限定することによって、公準や方法の特性を尊重するよう配慮している。事実、パスカルは一般化の傾向をもっている。大気の重さと流体の平衡を別個に研究したのち、彼は同一の原理が固体の静態や液体、気体の静態を支配することを示そうと努めるのである。しかし、これはデカルトの如く、統一、体系化から出てくるのではなく、「自然は互いに模倣する」(fr. 119) という自然類似の思想によるのである。この類似の思想は、パスカルにはア・プリオリな公理よりも支配的な思想である。そして実験のみが、自然がどの範囲まで模倣できるかをわれわれに示すことができるというのである。そして、われわれは類似とともに、かえって還元できない多様性のあることを確認するのである。すなわち、「自然は多様化し、そして模倣する。」(fr. 120) 従って如何なる意味でも知識の完全な統一、「全的総合」は実現できない。

上述のことから、われわれは部分によってしか現実を認識できないといえよう。「しかし、世界の諸部分はすべて相互に繋がりをもっている所以他の部分や、全体をさしおいて、一つの部分だけを知ることは不可能であると私は思う。……焔は空気なしには存続しない。それゆえ、一方を知るには、他方を知らなければならない。してみるとすべての物は、結果であり、原因であり、助けら

れたり、助けたり、間接的であるとともに直接的であり、また如何にかけ離れたもの、如何に異ったものも結びつける自然的見えざるきずなによって、たがいに支えあっているのであるから、全体を知らずに諸部分を知ることが不可能であるし、諸部分をくわしく知ることなしには、全体を知ることやはり不可能である、と私は思う。」(fr. 72)

かくして、人間は制限された展望しかもつことができない。それらの展望は制限されているがゆえに、誤っており、あるいは、現われた真理についてのみ真実である。無限に小なるものと無限に大なるものの中に位置して、「人間は、事物の始原をも終極をも知りえない永遠の絶望のうちにあつて、ただ事物の中間の姿を認知する」(fr. 72) ことで満足しなければならぬ。

デカルトは科学に関して、絶対的確信ともなる総体的確信 *certitude globale* を主張する。

これに対して、パスカルは部分的な、細分化された確信、そしてそのゆえに、相対的確信のみが科学においては可能だというのである。(未完)

- 1) パスカルの作品のテキストとしては、*Oeuvres de Pascal* du à MM. Léon Brunschvicg, Pierre Boutroux et Félix Gazier (Paris, Hachette, Les Grands Ecrivains de la France, 1914—1926) を用いる。*Pensées* の引用は本文中に、例えば、(fr. 282) の如し、その他の引用は「註」の中で、G.E. と巻・頁数でもって表わす。
- 2) 「世の最大の哲学者が、身を置くに十分すぎるくらい板の上に乗って、その下に断崖をひかえているとしたら、いかに彼の理性が身の安全を保証しても、彼は想像にうちまかされてしまうだろう。たいていの人はそれを考えただけでも、色を

失い、冷汗をもよおさずにはいられない。……猫や鼠を見かけたり、炭がはねたりしたために、理性が度を失うことがあるのを、知らない者があろうか。声の調子は、どんな賢者をも欺き、演説や詩の効果を変える。……笑うべき理性よ、風むきしだいで、どちらの方向へでもなびくとは」(fr. 82)

- 3) 「背後の思想をもたなければならない、そして民衆と同じように語りながらも、背後の思想によってすべてを判断しなければならない」(fr. 336) 「背後の思想」とは後に隠されたより真実な思想のこと。
- 4) 「この世のもので最も公平に配分されているのは良識である。……私たちの意見の多様なのは一方の者が他方の者よりよけいに理性を具えたところから来るのではなく、私たちが思想をいろいろ異った道を経て導くところから、同じことを考えるわけでもないところからくるのである。そもそも良い精神をもつだけではなお不充分であつて、良い精神を正しく働かせることが大切なのである」(*Discours de la Méthode*, 1 ère partie) デカルトのテキストとしては、*Oeuvres de Descartes* publiées par Charles Adam et Paul Tannery (Paris, Léopold Cerf, 1897 à 1913) を用い、このテキストを A.T. で表わす。
- 5) 本稿の執筆にあたって、Jean Laporte, (Paris, Elzévir, 1950) に多く負っている。
- 6) G.E. なお、この点に関しては、Jacque Chevalier *Pascal*, p.p. 48—60 に詳しい。
- 7) G. E. *De l'Esprit Géométrique*, t. IX, p. 245.
- 8) *Ibid.*, t. IX, p. 242.
- 9) *Pensées*, Lafuma, Delmas, fr. 1008
- 10) A.T. *Les Principes de la Philosophie*,
- 11) *Ibid.*, t. III, p. 212.
- 12) A.T. *Discours de la Méthode*, 6e partie.)
- 13) G.E. t. III, p. 266.
- 14) A.T. *Discours de la Méthode*, 2e partie)
- 15) A.T. t. II, p. 379.
- 16) G.E. *De l'Esprit Géométrique*,
- 17) A.T. t. X *Regulae ad directionem ingenii*. 邦訳、野田又夫訳『精神指導の規則』参照。